

2020. 2. 21 (日) マタイ23:34~36

23:34 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。

23:35 それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。

23:36 まことに、おまえたちに言う。これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。

<説教>

「蛇よ、まむしの子孫よ。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうして逃れることができるだろうか。」(マタイ 23:33)

イエスはこのように偽善者の律法学者やパリサイ人に言われました。

なぜ彼らはゲヘナの刑罰を逃れることができないのでしょうか。

それは彼らが、自分たちの先祖たちが犯した罪の歴史から何も学ぶことなく、神の預言者たちの血を流す、義人たちの血を流すという先祖たちと全く同じ罪を再び繰り返して犯すからです。

23:34 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。

23:35 それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。

23:36 まことに、おまえたちに言う。これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。

「もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう。」と彼らは自信満々でした。

それでイエスは、「ではおまえたちの先祖の時代と同じように、神であるわたしが預言者、知者、律法学者たちをおまえたちに遣わす。」と言われました。

それは、まるで「本当におまえたちが預言者たちを先祖たちとは違うように扱うかどうか、へりくだって預言者たちの言葉に耳を傾け、悔い改めて神に立ち返るかどうか試してみよう」と言われたかのようです。

「蛇よ、まむしの子孫よ。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうして逃れることができるだろうか。いや、できない。必ずおまえたちはゲヘナの刑罰を受ける。」と言いつつ、しかし、「だからもう今後、わたしは預言者たちをおまえたちに遣わすことは決してない。」とはイエスは言われませんでした。

「見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を（おまえたちに対して）遣わす」となおもイエスは言われるのです。

そこには、なおも彼らに悔い改めを迫るイエスのあわれみがありました。

イエスが律法学者やパリサイ人たちのところにお遣わしになる〈預言者、知者、律法学者〉とはつまり使徒たち、イエスの弟子たちのことです。

使徒たち、イエスの弟子たちはイエスに遣わされる、イエスの使い（使者）です。

彼らも〈預言者、知者、律法学者〉としてこの罪の世で、人々（罪人）に向かって神のことばを、イエス・キリストを、福音を語り、教え、罪を指摘し、悔い改めを迫るのです。

〈預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って…『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかっただろう。』〉と自画自賛し、誇っていた律法学者やパリサイ人の信仰がもし本物なら、イエスの使徒、弟子たちが宣べ伝えるイエス・キリストの福音にそのときこそは聞き、イエスを信じ、悔い改めることでしょう。

しかし彼らは「**そのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る**」とイエスは予告なさいました。

なお、この数日後にはイエスご自身が〈むち打〉たれ、〈十字架につけ〉られ〈殺〉されます。

イエスは唯一真の〈預言者、知者、律法学者〉として律法学者やパリサイ人の〈迫害〉をまずお受けになるのでした。

それで、イエスによって律法学者やパリサイ人のところに遣わされる使徒たち、弟子たちもまたイエスの代理人として、イエスと同じように〈迫害〉を受け、イエス・キリストゆえの苦しみを受けることがここで予告されてもいるのです。

「**そのうちのある者を…、またある者を**」と言われているように、イエスに遣わされる者が皆同じ苦しみ・迫害に合うわけではありません。

皆が必ず殺されるわけではありません。

しかしイエスは次のようにも弟子たちに言われました。

「人々がわたしを迫害したのであれば、あなたがたも迫害します。彼らがわたしのことばを守ったのであれば、あなたがたのことばも守ります。しかし彼らは、これらのことをすべて、わたしの名のゆえにあなたがたに対して行います。わたしを遣わされた方を知らないからです。もしわたしが来て彼らに話さなかったら、彼らに罪はなかったでしょう。けれども今では、彼らの罪について弁解の余地はありません。」（ヨハネ 15:20b-22）

律法学者やパリサイ人は、先祖の歴史の教訓から学ぶことなく、イエスを迫害して十字架につけて殺し、さらにイエスがお遣わしになるイエスの使徒たちの宣教の言葉にも耳を傾けず弟子たちをも迫害し苦しめ、ある者の血を流し、殺そうとしていました。

そうやって先祖と同じように、神によって遣わされた預言者、神の人、神が正しいと証しする義人に逆らい殺すという、ことさらに（故意に）神に逆らう不信仰と不従順に留まる律法学者やパリサイ人の〈罪について弁解の余地はありません〉。

確かに罪に大小はない、重い軽いはない、罪はどんな罪でも悪いものです。

それでもしかし、死に至るまで神に忠実な義人を、また神が正しいと証ししてくださった義人を、それゆえにあえて憎み殺し、その血を流すことがどれほど重い罪か。

それも一人や二人ではない、〈義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血〉を流した罪を神は

律法学者やパリサイ人に問い、その〈報い〉をなさると言われます。

〈義人アベル〉は言うまでもなく、創世記4章に記されているように、兄のカインによって殺された人です（これが世界で最初の殺人でした）。

「信仰によって、アベルはカインよりもすぐれたいけにえを神に献げ、そのいけにえによって、彼が正しい人であることが証しされました。神が、彼のささげ物を良いささげ物だと証ししてくださったからです。彼は死にましたが、その信仰によって今もなお語っています。」（ヘブル 11:4）

そして、「カインのようになってはいけません。彼は悪い者から出た者で、自分の兄弟を殺しました。なぜ殺したのでしょうか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。」（Iヨハネ 3:12）と書かれています。

〈神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤ〉のことは歴代誌第二24章に記されていることです。

〈神の霊が祭司エホヤダの子ゼカリヤをおおった。彼は民よりも高いところに立って、彼らに言った。「神はこう仰せられる。『あなたがたは、なぜ主の命令を破り、繁栄を逃がすのか。』あなたがたが主を捨てたので、主もあなたがたを捨てられた。」ところが、彼らは彼に対して陰謀を企て、王の命令によって、主の宮の庭で彼を石で打ち殺した。ヨアシュ王は、ゼカリヤの父エホヤダが自分に尽くしてくれた誠意を心に留めず、かえってその子を殺した。ゼカリヤは死ぬとき、「主がご覧になって、責任を問われますように」と言った。〉（II歴代 24:20-22）

このときの時代は南王国ユダの王ヨアシュの時ですから紀元前800年頃です。

しかしヘブル語（旧約）聖書原典では歴代誌が最後に置かれているので、〈義人アベルの血から、…バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血〉とはつまり聖書の初めから終わりまでのあらゆる〈正しい人〉を迫害し、ときには殺した罪、またそうやって神にとことん逆らった罪を神は〈ご覧になって、責任を問われる〉のです。

もちろんカインはカインで神からその責任を問われましたし、ヨアシュ王とイスラエルの民たちも神から責任を問われました。

しかし今やイエスを憎み殺そうとし、その後にはイエスがお遣わしになる使徒たち弟子たちを迫害し、殺しもする律法学者やパリサイ人たちは、そういう自分たちの罪に加えていわば累積債務のように先祖の罪も負って神の〈報い〉を受けなければなりませんでした。

なぜなら、彼らは「先祖のようであってはならない」（「カインのようになってはいけません」）という神の警告を聞きながら無視して悔い改めず、また神が支配なさっておられる歴史から学ぶべき教訓を学ばないで、先祖と同じように「自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかった」がゆえに兄弟を殺してその血を流すという罪を繰り返し犯すからでした。

それでも、そんな罪への〈報い〉を、地上の命あるうちに、イエスへの信仰と悔い改めに導くための神の「こらしめ」としてへりくだって受け、この後すぐに自分たちが十字架につけて殺し、しかし神がよみがえらせるイエスを信じ、自分たちが先祖と同じように犯して来た罪を認めて悔い改めるなら、救いがあります。

それこそは、イエスこそは究極の永遠の〈報い〉〈ゲヘナの刑罰〉から免れるただ一つの道だからです。

〈地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかる〉とは、ここではどこまでもイエスへの不信仰を貫き、悔い改めを拒む律法学者やパリサイ人の罪に対する〈報い〉のことです。

しかし、それでも、あえて言わせていただくなら、イエスを信じて、自分の罪を認めて悔い改める者—私たち—にとっては、〈地上で流される正しい人の血が〉私たちに〈降りかかる〉とは、「イエスの血の注ぎかけを受ける」(cf. I ペテロ 1:2)、「心に(イエスの)血が振りかけられ」る (cf.ヘブル 10:22)ということになるのです。

それが律法学者やパリサイ人の〈わざわい〉、彼らが受ける〈報い〉から私たちが免れるただ一つの道なのです。